

山氏所屬の第三大隊は後方へ迂回して、南東から攻める。歩兵第十連隊独自での滕県城攻撃である。

第三大隊は、片山氏が言われる通り、敵の必死の防戦に死傷者が続出した。煙幕を焚いて河を渡り、第九、第十中隊が突進した。しかし、歩兵だけでは厚い城壁は破れないと、赤紫連隊長は工兵一中隊、野砲、野戦銃砲、銃砲兵一大隊を指揮下に入れ、十七日午前七時より砲撃を開始し、城壁破壊砲撃により突破口を開いた。特に重砲は凄かった。

耳をも聳する砲声の中、南門からは第九中隊（片山氏所屬）が大歓声をあげて城壁下まで突進したが幹部がバタバタと戦死、その屍を越えての突入だった。だが堅固な城壁は砲弾でも崩れず、各中隊はいったん後退。敵の逆襲を防ぐため民家に放火、黒煙が上がった。

午後の砲撃で城壁の一角が崩れ出した。この機に第九中隊が突進、第一小隊長代理の岩本曹長が工兵の梯子で単身城壁にのぼるが、一本では長さが足りぬので途中で梯子を掛け直しよじ登り、拳銃と軍刀で敵一、

三人を倒し、みごと一番乗りをした。

当時、第三大隊の将兵は九一二人であり、岩本曹長に続いて、午後五時、城壁東南門に日章旗を掲げた。敵からは文字通り手榴弾が降るようであった。その一発により片山氏は足を負傷し後送されたのである。城壁は占領したが、市街には敵が充満していた。敵は西門へ殺到し将棋倒しとなりながら敗走したという。

河南作戦の惨状

栃木県 乙川 壽

私の家族構成は、両親と兄弟七人で女子は一人、私は四男でした。家は小作農家で、自作は三反歩で全耕作地は一町五反歩ほどでした。

当時村の世情は大金持ちは一部の人たちで、大部分の人たちは貧しい生活をしていました。一般的には三度三度の食事が出来ることを喜んで働くという程度でした。

家の近くに天沼川という清流があつて、小魚もたくさん泳いでいましたが、今は汚濁して魚も少なくなり、子供たちの水遊びも出来なくなりました。近くに寺山観音寺という国宝の本尊が安置してあつて、祭礼の時は多くの人が参詣し大変賑やかでした。近隣人達は人情味が厚く、皆さんが和やかで、長閑な村でした。

私は子供のときから餓鬼大将で、自分で言うのもおかしいが正義感が強く、不正なことには目をつぶることができず、体当たりで立ち向かっていきました。高等科一年（現在の中学一年）のとき、担任の教師が一人の級友にひいきしているの、その友達と取っ組み合いの大喧嘩をしました。担任教師は私が悪いと教員室で殴り飛ばしました。その時に左耳の鼓膜が破れ、耳鼻科の医者に行つたのですが、頭はガンガン鳴つて現在も左耳は物音を聞き取ることは出来ません。そして当分の間学校への登校は拒否しました。しかし学校長が迎えに来たので登校して一応卒業しました。

就職は技術者になるため千葉県市川市にある軍需省

指定の特別鍛造工場に入社しました。業務は精密機器や重火砲その他の回転台座の製作でした。一ミリの狂いも無く確實厳正さが要求される作業でした。この精密機製作所は東京の蒲田と私の工場と日本全国に二カ所だけの最重要の機械製作所でした。三年ほど経過した頃には班長となり、責任者を務めるようになっていました。

徴兵検査は泉村の小学校であり、徴兵執行官から「乙川壽・第二乙種合格・理由左耳不具につき」と宣告されました。私は身体頑強で甲種合格と思つていたのに残念でした。翌日役場の兵事係が来て「第二乙は第一乙に編入されて現役兵として入隊するからその心積もりで」と言われました。

引き続き会社で業務に精励していました。そのうち父親から電話があつて「召集令状が来た。すぐ帰れ」でした。会社の上司、同僚に壮行会をしていただき家に帰りました。令状は臨時召集令状で「昭和十三年八月二十日、宇都宮野砲第二十連隊に入隊せよ」でし

た。

親戚・近隣の方々友達の皆さんに盛大なお見送りを受けて壮途につきました。この頃は中国大陸で連戦連勝の皇軍でした。全国民が何も知らず酔い知れていました。

入隊、即、教育係将校と下士官教育係助手の上等兵が全員を整列させて、第一声「貴様等達は一銭五厘の兵隊だ。只今から各任務教育に就くが充分に心して国家国民のために活躍せよ」でした。内務班教育は、明治天皇陛下から賜った軍人勅諭が軍人の総ての基本です。砲兵操典をはじめとして各典範令を、そして勤務守則等々勉強させられました。自分は前述の如く勝ち気で負けず嫌いでしたから、戦友が寝ている時でも常夜灯の下で勉強して、いつも第一選抜で進級し、同年兵が一等兵でいるのに伍長勤務上等兵（兵長）に進級しました。その後も下士官志願をしないのに陸軍砲兵伍長に任官しました。

野砲隊は砲手班と弾列班とに分かれますが、共に軍

馬が原動力です。馬の手入れや運動が一番大切で、少しの休養も無く苦勞しました。前述の如く兵隊は令状一本（一銭五厘）ですが、軍馬は「天皇陛下から預かる宝物である」といって、たて髪、尻尾の先、脚の蹄にいたるまで丹念に手入れを命ぜられ大変苦しい思いをしました。

第一期の検閲も無事終了して、ホッと息つきました。

昭和十四年一月、「軍令甲種一号」「陸支機密第五号」で独立混成第八旅団砲兵隊第一中隊、編成要員の命令を受けました。自分は山砲の弾列と決定し、日夜特別訓練を受けました。全員最前線へ出動するのだからと刻苦勉強しました。同年八月十日編成完了して、翌十一日宇都宮の兵営を後に歩武堂々と行進して、歓呼の声と日の丸の旗の波に見送られ列車に乗って大阪に着きました。もちろん軍馬と一緒にですから、大変苦勞しました。

同月十三日大阪港出帆、途中上海は恙無く、十九日中国の塘沽に上陸しました。列車にて一路石家荘の

屯営に無事赴任しました。第一中隊長の訓示で「ここは敵国である。いついかなる事態が出現するかも知れぬ。絶えず心を引き締めよ」でした。古年兵に種々と指導されながら勤務に服しました。当初は同地区の警備勤務が主でした。

蒋介石の正規軍、毛沢東の八路軍、便衣隊（ゲリラ）等の襲撃があるのでちよつとの油断も出来ず嚴重な警戒態勢で日夜勤務に精励しました。少し現地に馴れたところから出勤するようになりました。出勤に際しては、人事係准尉に「自分は乙川家の四男です。この身はお国に捧げる覚悟です。出陣、決死隊には絶対参加させてください」と申し出ました。准尉も私の気持ちが分かったのか爾後の作戦出勤には必ず私の姓名が発表されました。

自分は山砲小隊・弾列分隊に決定しました。小隊長将校一人、山砲一門、分隊長一人、兵員十二人、軍馬五頭、行動によっては山砲は分解して砲身、台座、接地脚等です。弾列分隊は分隊長のほかに兵員二十五人、軍馬二十頭です。小隊の警備用に三八式歩兵銃が

十丁ほどだったと記憶します。石家荘を起点として周辺への出勤、討伐、肅正警備等々で、一度出勤すると一週間から半月ほどの期間があり、出勤には必ず歩兵に随行します。砲兵のみの出勤は無しでした。

西楊村、侯王村、馬山嶺、黒山溝、桃源鎮、萬岸、破門口、石門西南山岳地区、彰徳山地区、来井肅正、晋県、京漢線沿線、石太漢線、黄河渡河作戦等々、幾多の作戦に参加しました。

昭和十六年十一月二十一日（中支）河南作戦は忘れることの出来ない戦い（負け戦）でした。黄河渡河は工兵隊の鉄舟で兵隊、軍馬、大砲と大変苦勞しながら渡りました。

敵（蒋介石正規軍）が山峡に集結しているとの情報があり、前面の山地（海拔七〇〇メートル）に布陣を命ぜられ、山上の大地に山砲を引き上げ、開脚、固定設置し、発射に対して万全を期しました。山は東北は緩やかな登りの緩斜面で、敵のいる南西方向は急峻でした。砲兵布陣には最高の地形でした。自分の乙川分

隊も五〇メートルくらい後方のくぼ地で畑のようなところに軍馬二十五頭を収容し、傍らに携帯天幕を張って待機しました。小隊長は少し離れた高台に観測と一緒にいて命令を出しました。

山砲隊は通常歩兵陣地の後方に布陣して、歩兵の前進突撃の前に敵陣に砲火を浴びせて撃滅し、その直後に歩兵が突っ込むのです。砲の発射能力は飛距離約千メートル、連発射能力は一分間に三発、発射で約二十発で一区画となります。無謀な発射は砲身が焼けて使用不能に陥るからです。

「本部命令（敵遠し）一夜休養し明日攻撃前進」で、山砲隊は砲を設置し陣地構築しているからその地にて休養、夜を迎えました。現在思い返しても不思議に思うことですが、なぜ最前線にいるはずの歩兵部隊が砲兵の後方にいたのか。第一線に裸の砲兵隊が立っていたのは不可解千万です。これが混成旅団の弱点だったのか？ 真夜中過ぎに手榴弾の炸裂音を間近に聴き、スワ敵襲と思いました。一〇〇メートルほど前方で「イー・アル・サン」の掛け声。まさしく支那軍で

す。その掛け声で一度に何十発もの手榴弾を投擲して、入れ替わり立ち替わり連続して攻撃してきました。

山砲には発射直前に信管を切って、何分後、何秒後に炸裂させるのか、瞬発信管は樹木の小枝に当たっても炸裂するものがあり、またゼロ距離発射という砲口を飛び出すとすぐ炸裂というなどの射撃方法があります。

警備歩哨の「敵襲！」の声、自分の弾列分隊は各人岩陰や樹木の陰に身を隠しました。ゼロ距離発射の発射音が数発聞こえ、発射光がパァッと赤く光りました。が、手榴弾の炸裂の音響が激しく、山砲分隊の安否は不明でした。

軍馬が驚いて高く嘶き、手榴弾が飛来してきました。「やられた」の声を聞く。五、六人同時でした。小銃は敵が目撃出来ず、同士討ちの危険があるため発砲出来ません。自分は肉弾戦を決意して全員に銃に着剣を命じ、自分は右手に軍刀、左手に十九年式拳銃の安全装置を外して身構えました。「一人十殺の精神だ。

突撃は俺の命令だぞ」と告げました。敵はそれ以上の進攻なく山砲を捕獲して引き上げる模様でした。が、山砲の接地脚が頑丈で外れず右往左往しているようでした。

東の空が少し白みかけた頃、山形の歩兵部隊が前進してきました。敵はほうほうの態で一目散に急峻な山を駆け下って逃走しました。思えば敵は地理を充分理解しており、日本軍の布陣の状態は想像出来た上での夜襲だったのでなかったか。

友軍の損害、山砲分隊全員玉砕、自分の分隊六、七人の重軽傷者を出し、軍馬数頭死亡で、敵は逃走しました。実際には僅かな時間でしたが、自分には物凄く長い夜だったように思えました。

その日は、戦傷者を後方衛生隊に送り、山砲分隊の英霊を後方に安置して、お祈りを捧げ、その日のうちに茶毘に付し、ご遺骨は各英霊の故郷に後送すべく幹部将校が指揮していました。この夜の敵襲の戦闘だけは、軍隊生活三年七カ月の中で一番残酷悲惨な想い出です。後生忘れることは出来ません。

その後石門に帰隊して、石門付近の警備の任に就きました。交代部隊が来ましたので内地帰還のために昭和十七年二月石門を出発しました。

山海関、釜山を経て、二月八日門司に上陸し、宇都宮の原隊に帰隊しました。二月十六日付で「陸支機密第二十五号」をもって召集解除となりました。故郷泉村へ帰り両親はじめ皆さんに無事帰国したことを報告しました。

翌日、村役場に帰還報告に行き兵事係と話をしましたら、村長が出て来て「乙川君永い間ご苦労様でした」と挨拶をされ、村長室に呼ばれていき、戦場の話を聞かせてくれと言われました。村長は陸軍砲兵中尉の後備役将校だったので野砲隊のことが知りたいらしく興味津々でした。

私は元の市川の軍需工場に籍がありましたので就職して働いており、時々泉村へ帰りました。その都度、村長はいつも喜んで迎えてくれ、いろいろと談合しました。

戦線が拡大し村の若者はどんどん召集され、徴用

令、学徒動員令、女子勤勞挺身隊とお国のために出て行っており、あとは老人と子供だけの村になりました。でもお国のためだと頑張るしかない、と話し合いました。私は軍需工場で働いているゆえか二度目の召集も無く、昭和二十年八月十五日を迎えました。

工場で「十二時に全員広場に集合せよ」で、夏の暑い日差しの中、ラジオの放送がありました。心静かに聞きました。天皇陛下の玉音放送でした。一瞬目の前が真っ暗になり、私たちは今まで何のために働いてきたのだと思いました。

日本は負けたのだ。神州不滅は嘘だった。

工場は閉鎖になり泉村へ帰りました。なんとかしようと思った矢先に村長に出会いました。私は家が無いので当面借地の一反も借りて自宅を作る心底だったのですが、農地法で他人に土地を貸すと取られてしまうというので、村長に相談しました。村長は農政振興のために全力を尽くしていました。「乙川君、今未墾地開墾法というのがある。それを検討してみよう」と言われて、「君のようにお国のために充分働き、まして

弟さん二人も戦死させた家の人に村としても充分考えて応援します」とのこと。そして即調査していただきましたら、近くの人で部落の東側に十六町歩の未墾地を所有している人がいました。一人三町歩まで所有できるといので、メンバーを組んで未墾地開墾を申請して受理され、現在は二町三反ほどの宅地や田地畑地を活用しています。

苦勞させた妻は先年鬼籍入りし子供三人は親孝行です。今日の平和は、惜しむらくは大東亜戦争で多くの戦死された尊い犠牲の上の平和です。英霊の安らかな眠りを心から念じます。 合掌

北支河北の戦闘

(極) 支那駐屯第一連隊

埼玉県 井上貞夫

私は昭和十五年徴集兵の検査で甲種合格となった。

生家は当時の東京市浅草区(現台東区)浅草馬道にあ